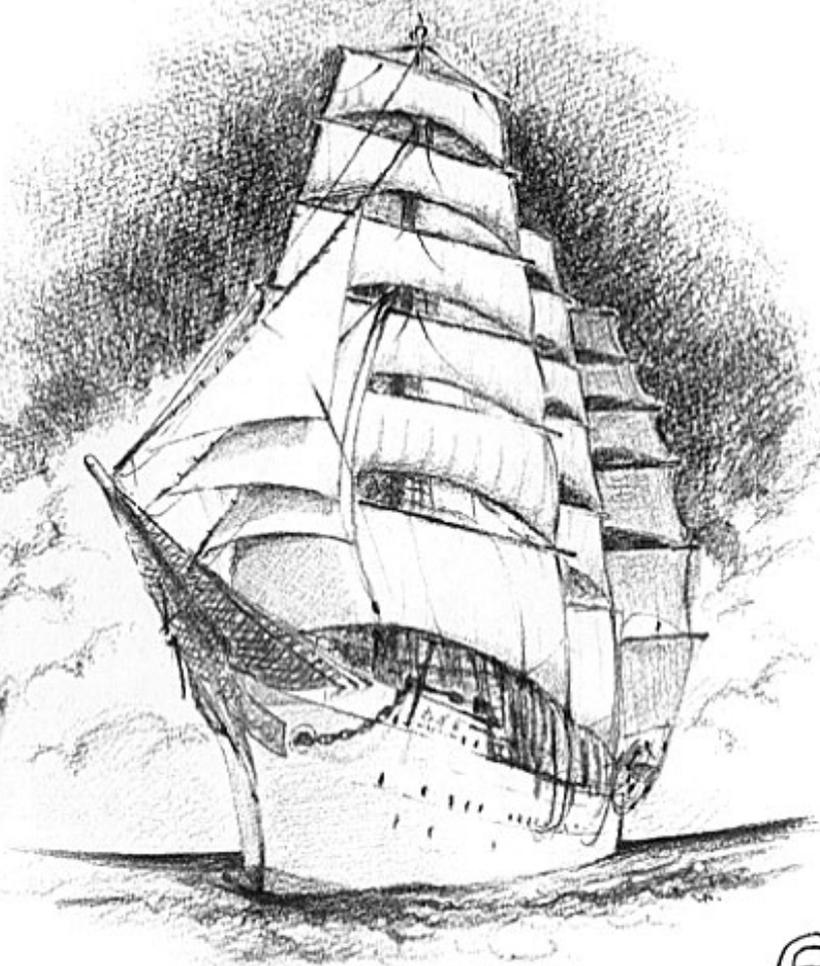


平成28年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第56巻6月号(通巻683号)

風土



6

朽の花

神蔵器

朽咲くや小学校に大手門
燕来て書き込み多き農暦
兄の忌や眼閉ぢても合飲の花
ふるさとは蛭にのこす大藁屋
御輿洗ひの雨となりけり心太
雹打つて平らな水の沸騰す
父死後も山へ向きたる籐寝椅子
生きてゐてカサブランカの今朝ひらく



お知らせ

この度、神蔵器主宰より南うみを氏が次期主宰に指名されました。
七月号より山河集・風土集の選は南うみを氏が行います。
これに伴い神蔵器主宰は名誉主宰に、南うみを氏が主宰となります。

平成二十八年五月吉日

風土俳句会

竹間集

同人作品



春手套

土井三乙

玄関に忘れてゆきし春手套
春光や日課に登る外階段
蜷買ふ妻は産地こだはりて
遮断機上がり真正面に春の海
露の臺ひとつ摘みあと二つ三つ
田楽や此度も祖の話出で
峽に日の差せば子の駈け猫柳

発蝶

根岸善行

中庸といふ発蝶の高さかな
苗木市ひと巡りしてきたのみ
水蹴つてよりはひたすら鳥帰る
沈丁の夕べは風の濃かりけり
八十の齢育む柳の芽
暖かや跳んでとべたる潦
急ぐ人に楽しむ人に日の永し

薄氷

林いづみ

岸辺より夕日のからむ蘆の角
ふるさとの夜具重たしよ猫の恋
渋民の径の土筆にかがみけり
落椿ひと日は掃かぬままにせり
てふてふや風のぶつかる桑の瘤
しんがりに暖簾をくぐる臍かな
薄氷や晩年足踏みしつつ来し

金平糖

小林共代

花一枝添へて京都の金平糖
城山の裾の流れや菖蒲の芽
園児らの小さき歩幅や桜東風
神田川浮影も桜さくらかな
鳥曇り山ふところに朱の鳥居
川沿ひの変電所跡木の芽風
大利根の河口広げて鳥帰る

梨の花

中根美保

目刺より抜かれし薫をほめにけり
うつそみの雲混み合へる涅槃かな
雪柳花噴くまでのうねりかな
クレソンの群過ぎしより水急ぐ
花屑の色あたらしや野面積
枳殻の芽吹は遅し三鬼の忌
水車小屋の暗き一灯梨の花

蘆芽生ふ

間島あきら

風光る富士ビューポイント第一番
蘆芽生ふ水底歩む日のひかり
とどのはぬながらも初音聞こえけり
交響曲「田園」流す苗木市
春夕焼水の平を置き去りに
月朧廃止となりし社員寮
天に吊る高層階の春灯

兄の蕪

南うみを

燕来る天地返しの鍬のうへ
さへづりの真中つらぬき鴨の声
天辺を蟻のくすぐる土筆かな
三月八日各社宛、二句
遺されて兄の蕪の莖立てる
花菜漬辛し兄焼く煙濃し
荒鋤の土つややかに涅槃かな
初蝶のいきなり海へ向かひけり

春の鴨

柴田 久子

のどけしや娘より長寿の箸届く
雛の段降りて官位のなくなりぬ
八十路わが赤を装ひ雛納む
屋上に女の声やさくらの夜
石の家と言へど木の香のあたたかし
うららかや「ばあば」と呼ぶ子見上げぬて
信号にピヨピヨ鳴かれかげろひぬ
用もなき街を歩きて花粉症

交 番 に 犬 探 す 女 日 脚 伸 ぶ
鳥 帰 る 赤 き ラ ン プ の 駐 在 所
春 雨 や 像 と い ふ も の み な 伏 目
触 れ 合 は ぬ 距 離 に 鴉 や 甘 茶 仏
旧 道 は 空 路 へ 続 き 花 菜 風
残 る 鴨 陸 を 歩 き て 空 仰 ぐ
残 る 鴨 念 仏 声 を 連 ね ゆ く
陸 に 出 て 雨 に 降 ら る 春 の 鴨
一 畳 も 八 畳 も あ り 花 筵
さ く ら 咲 く 山 が 唾 へ し 社 の 灯
さ く ら 散 り い づ れ 孤 独 と なる 日 来 る
額 縁 の ご と き 裏 窓 花 の 昼

山河集

同人作品



田村すゝむ選

蜃気楼妻を失ふ日を恐る
文豪も所詮売文亀鳴けり
てのひらに鳴らす釣銭啄木忌
たらの芽や老いても妻は栄養士
横綱が小鉢を選ぶ苗木市

豎山道助

初ざくら風のうしろを一人ゆく
花冷の秘仏をろがむ膝小僧
等伯のさくらの色に春の宵
坐禅してしばし仏となる日永
水音の追ひかけてくる牡丹の芽

雨宮桂子

春雨や妻の旅荷を馱へ負ふ
文机の奥に遺言書鳥雲に
図書館でもの書く癖や柳の芽

竹生田勝次

暖かくなりて暮仲間勢揃ひ
靴磨くことも愉しき日永かな

鈴木庸子

力満つ黒板アート卒業す
国盗りの合戦跡や青き踏む
古井戸は城の抜け道亀鳴けり
鷹匠町残る城下や涅槃西風
ねんごろにまるめし彼岸団子かな

吉永すみれ

半島は今も単線つくしんぼ
花散るや遠流の島の能舞台
日の匂ひ風の匂ひのつくし摘む
寒明くる川の底迄日の射して
椿落つ河津三郎血染め塚

子の部屋と繋ぐ温くさや糸電話
嫁ぐ娘に持たせる雛に風通す
佐山 五稜

真珠婚御所に間近き雛の宿
百翔ちて百の羽音や大石忌
夕凧の酒の一字が踊りゐる

国東の芽吹き雨や磨崖仏
奥田 茶々

梅東風や匙で崩さるオムライス
大方は夫婦連れなり植木市
すこしだけ欠ける日食地虫出づ
うづくまるサハラ駱駝涅槃西風

衰への進む眼や辛夷の芽
森屋 慶基

母を見て母に見らるる春炬燵
隠居まだ似合はぬ歳に梅の花
剪定の鋏にたぐる鳥海山
仰け反るも俯く人も梅匂ふ

絶筆の新聞小説春半ば
上村 葉子

利休の忌算に日矢の射してをり
キヤタピラが地球の春を掘り起こす
初蝶や赤きベレーを斜交ひに

春寒し和綴ぢの本の糸締める

木の芽山海へなだれる安房の国
三月や「風の電話」が天を突く
雲に鳥旅は八十路の万歩計
松崎 雨休

『菜の花の沖』積みあげて菜の花忌
健忘は老いの御負けか世は臍

鍛冶町に鍛冶屋なくなり春寒し
啓蟄やハミングの子に追ひ越され
立雛寄り添ひ影の一つかな
土井ゆう子

雛の間に亡き母とみて夢の中
シクラメン見舞ひし人に労られ

出国を見送るゲート冴返る
平瀬 千会

貰ひきし野菜諸手に青き踏む
春うらら聞きもらすまじ師の言葉
一本の修道院の桜かな
もの芽や二人の暮らし始まりぬ

箸置きに桜一輪祝ひ膳
大森 尚子
糸桜米寿の父の背筋伸び

◇特別作品◇

雛飾る

上村 葉子

三つ四つ摘み残しおく落の臺
ものの芽は日を追ひ駆けて光りけり
手をつきて匂ひ菫に顔を寄す
早春の空を水面に利^と根^ね川静か
読みさしの本うつ伏せに春炬燵
木の雛顔の薄紙そつとそつと
雛飾る齡重ねし姉妹
古民家の蔵の扉全開雛祭

かき餅は母の匂よ雛のころ
下萌ゆる八十路漢の力瘤
墨堤に手を振る人や花辛夷
金縷梅や窓半開の土の蔵
カリヨンの尖塔高し鳥雲に
啓蟄やからくり時計の小びと達
春雷に暫したじろぐ郵便夫
単線のボタンで開く扉つくづくし
ダイヤゼル車菜の花畠の軸となる
春隴運河にもある信号機
春の潮舟乗り場跡濯ぎをり
塩の道繋ぐ運河の春霞

風土集



神蔵 器選

沢水の出合ひ重なり山笑ふ 横手 森屋 慶基
首桶も棺も国宝雁歸る
菫咲く終の棲みかに毛越徑
平泉四方八方囀れり
衣川溪を隠せる柳の芽
踏青やけものは持たぬ土不踏 川崎 豎山 道助
春北斗黄泉平坂ああたり
芹の水かがみて慕情隠し得ず
アリバイは大坂場所の砂かぶり
啓蟄やカフカ生家の鉄格子
現況と合はぬ公図や地虫出づ 川崎 鈴木 庸子
傷痕の手首に寒のもどりかな
なだめあるこむらがへりや冴返る
はらからの声なき春の障子かな
穂の芽やせはしくなりし雑木山

春動き上州野州山晴れり 桐生 多胡 操
振り向いてやはり独りの春炬燵
北風渡良瀬川面波三角
春の夢亡夫の旅路のやすかれと
飛ばされて帽子地を這ふ春一番
箬置は靴の形や山笑ふ 伊東 曾根 治子
ニュートンの引力とやら椿落つ
ゆつたりの旅のプランや黄水仙
旅果てる海に上がりて臘月
春浅し伝法院の大絵馬展
さへづりや幻住庵に正座して 福生 雨宮 桂子
あたたかや翁と共にひと日ぬて
鳥帰る千体仏に背を向けて
亀鳴いて蓮如鹿の子の小袖かな
うしろよりことばのはづむ春の月